琉球大学学術リポジトリ

合宿研修：基礎ゼミに組込んだ法学専攻課程

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学教育センター
	公開日: 2018-07-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 高田, 清恵
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42125

合宿研修―基礎ゼミに組込んだ法学専攻課程

法文学部講師　　高　田　清　恵

1　合宿研修の趣旨と目的

琉球大学では、従来より１年次と３年次の学生を対象に１泊２日の合宿研修を行っている。その目的は、「新入生及び在来生と指導教官が休日を利用して、１泊２日（原則として）の合宿を行い、対話やレクリエーションを通じて、人生を語り社会を論じ、あるいは、学問への取組み方を話し合うことによって、相互信頼を確立し、学園生活を有意義にすること」にある（平成11年度新入生及び在来生合宿研修実施要項）。

研修の内容としては、年次に応じてその重点が異なっており、１年次学生は「親しい友人・仲間を作る場とする」「大学生活を有意義に過ごすための知恵、諸注意」に、３年次学生は「卒業研究を行う心構え」「社会に出るに際しての心構え」「就職活動について」等に重点がおかれており（琉球大学厚生補導委員会「指導教官の手引」７頁）、単なるレク、遊び、飲み会、親睦会ではないことに留意するよう注記されている。

そして、とりわけ「本研修は、学生の自主性等を啓発することをネライとして企画されたもの」（琉球大学厚生補導委員会「指導教官の手引」７頁）として学生の自主性の養成が主要な目的になっており、学生が自発的に企画・実施し、指導教官がその指導・助言という側面的な支援を行う。

以上のような目標に沿って、学部や学科、専攻の実状に即して学生自らが学部・学科独自の目標を設定し、合宿研修を実施している。

2．1999年度法学専攻の合宿研修の取組み
―基礎演習の一環として―

1999年度法学専攻では、1999年７月10日、11日の２日間、名護市のいこいの村おきなわにおいて、１年次の合宿研修を実施した。

最も特徴的な点は、１年次合宿研修を、必修科目である基礎演習の一環として位置づけて取り組んだことである。すなわち、合宿研修をそれだけ単独で行うのではなく、基礎演習の目的と関連させ、基礎演習の年間計画の中にあらかじめ位置づけ、授業として実施したのである。

この結果、後でも述べるが、前年に比べ格段に多くの学生の参加を得られた（昼間主においては９割以上）ことや、その内容も「単なるレク、親睦会でない」というとおり、充実したものにすることができたと言えよう。

1999年度法学専攻１年次の基礎演習では、①大学生活における勉学及び交流の単位となる「クラス」と位置づける、②学生自ら積極的に勉学できるような勉学の方法を身に付けさせ、また問題意識を発見させる、③各クラスの中でグループを編成し、グループ単位での調査、討論、報告を主たる内容とする、という３点を基本方針として取り組んだ。（樋口一彦「学問への誘いとリーガルマインドの種蒔き－法学専攻『基礎演習』－」琉球大学教育センター報第３号、2000年３月、23頁以下参照。）

合宿研修では、この基礎演習の基本方針に即し、懇親会やバーベキューだけでなく、ディベートやハンセン病患者の隔離問題に関する講演を実施、積極的な勉学姿勢・勉学方法の修得と、問題意識を発見させる場とした。以下、具体的に、合宿研修の内容と準備過程について述べよう。

3．合宿研修の具体的内容と準備過程

(1)　準備過程

―クラス長らによる実行委員会と、外部講師の講義―

事前の準備過程の中心となったのは、クラス長（各クラス２～３人、計約10人、昼夜合同）からなる実

行委員会である。4月当初の基礎演習において、クラス長を選任し、合宿研修の実行委員も兼ねることを伝えた。そして、5月という比較的早い頃から、実行委員会を発足。以降、合宿までの間、約週1回（合宿直前には週2回ほどに増えたようであるが）の間隔で開催している。この会合にはなるべく指導教官も出席するようにしたが、あくまでも補助、助言の役割に徹してきた。必要な場合には、合宿研修を経験したことのある指導教官以外の教官にも出席していただいた。また、より学生に身近な存在でアドバイスができる、院生のティーチング・アシスタントにも指導・助言をお願いし、当日も参加してもらった。

実行委員会では、合宿にかかわる種々の手配、内容の確定等すべての準備を行うとともに、ディベートのテーマや対戦方法等もこの実行委員会において決めた。

加えて、多数の学生の参加を得るために策も練っていたようだ。例えば、6月末頃には各クラスごとに、クラス長から学生へ直接参加を呼びかけたり、費用をあらかじめ徴収したりしていた。また、皆で一緒に行く方が確実に参加してもらえるだろうとバスまで手配したり、少しでも費用が安い方が参加するだろうと費用を浮かせる方法を考えたりと、その積極性にはわれわれ教官も舌をまいた程だ。

直前には、クラス長以外にもバーベキュー班やレク班といった役割に当たった学生も実行委員会に参加し、準備にかかわる学生が徐々に増えていった。

他方、合宿研修で取り組むディベートについては、これは学生も教官も初めての試みであった。そこでまず、授業の中で、外部講師（渕辺美紀講師）を招いて、ディベートの方法についての特別講義をを行い理解を深めた。この点も特徴的であろう。以降、合宿までの間、班ごとにディベートの準備をすすめ、必要とあれば教官が指導、助言を行った。

最終的な、一泊研修の全体の打ち合わせ（オリエンテーション）も、基礎演習の授業で行った。

(2) 合宿研修の内容と特徴

合宿研修の具体的内容は、以下のとおりである。

・ディベート

先に述べたように、事前に外部講師を招いて学習した。1クラス6名1グループを出し、クラス対抗で2試合行った。ディベートのテーマは、「学校の制服の賛否」とし、1試合30分で行った。残りの学生が判定をつとめた。進行から判定まですべて学生が行い、最後に教官がコメントを行った。

・ハンセン氏病患者の隔離問題についての講演

通常のカリキュラムの中では聞けない、学生の身近な社会問題について扱い、社会に対する問題意識の形成の契機となるよう、講演を行った。テーマとして、沖縄の現在の社会的問題の一つであるハンセン病の隔離の問題について、法学専攻課程の森川恭剛助教授に講師をお願いした。

・懇親会・バーベキュー

親睦の機会として、懇親会とバーベキューを行った。企画から材料の購入、実施まで学生が行い、これには、クラス長以外の学生に「バーベキュー班」「レク班」として役割分担を行ったため、これらの学生も主体的に合宿にかかわることができたと思う。

4．評価と意義

以上、合宿研修の概要について述べたが、その評価と意義について、合宿後に書いてもらった学生の感想文も交えながら、若干の点を指摘をしたい。

(1) 高い参加率

第一に、従来に比べ高い参加率であったことが評価できよう。昼間主においては9割以上というほぼ皆参加が得られた。これにはいくつか要因があると思うが、一つには基礎演習の一環と位置づけたことが大きいであろう。二つには、学生が主体的に、バスの手配や費用の徴収、参加呼びかけ等をして参加を求めてきたことの成果であると思う。

(2) 自主性・社会性の向上

第二に、自主性の向上が図れたことである。と

同時に、合宿の企画から手配等、高校までには体験したことのない学生がほとんどの中、社会性の向上にも大きく寄与したのではないかと思う。とりわけクラス長らについては、実行委員会の発足当初と比べその成長ぶりは目を見張るものがあった。そのうちの一人は、クラス長を経験したことについて、「目的も意識も違う人々が集まってる集団をまとめるのは難しいなとわかった事だけでも良かったと思います。」と後に述べている。

またその後においても、例えば、次年度の新入生歓迎会の開催や、転学部してきた学生のための歓迎会を開催したり、基礎演習のお疲れ会を開催したり等、このときのクラス長を中心に、積極的な活動が継続される点からも指摘しておこう。

(3) 親睦－昼間主・夜間主の学生の交流－

第三に、親睦、交流が図れたことである。参加学生からは、「いろんな人と話ができて、楽しい2日間でした。」「他の組の学生たちとの交流もあり友達が増えたということが一番よかったと思う。みんないろいろな学校からの寄せ集めで、友達になるのは難しいと思っていた。実際入学してからの一ヶ月は高校からの知り合いや昔からの友達ばかりと一緒で、大学でできた友達は数えるぐらいしかいなくて、この研修でいろいろな友達が増えてうれしかった。」と述べている。 特に昼間主と夜間主の学生とでは、それまでほとんど顔を合わせる機会がなかったため、「一泊研修は、夜間の人との交流もできたり今まで話したことのない人とも話ができたりしたのでよかったです。」という感想が出ている。

(4) 主体的・積極的な勉学態度の形成
－ディベートを通じて－

第四に、ディベートと講演を通じて、主体的で積極的な勉学態度の形成に寄与できたことである。

実際にディベートに参加した学生は、「ディベートについては、真剣に腹が立ったなあ。何故なら、どう考えたって、自分の方が正しいのに、向こうが勝っちまったんだもの。」と、教官が思った以上に真剣に、白熱した試合を展開したようである。他の学生も「一泊研修のとき、初めてディベートをしました。準備期間も一週間しかなかったし、今までやったことがないので、何をすればいいかわかりませんでした。･･･ディベートの本番では、相手の人達がたくさん調べてあったのですごいと思いました。あまり私は上手にできなかったけど、ディベートが体験できたことは良かったです。」と述べている。

ディベートを実際に行った学生だけでなく、見ていた学生にとっても、大いに刺激になったようである。「一泊研修のディベートはとても良かったと思います。初めて見たけれど、見ている側としても、見ておもしろいし、考えさせられました。」「合宿の思いでは、ディベートがとてもうまかったことが印象に残りました。難しい言葉なども飛び交いあまりわからなかったです。」「ディベートをする人、みんなが発言していたのが良かったと思う。前準備もしていて、すぐには思いつかないような考えもたくさん出てきたのも良かった。自分の思っていることを、聞く人みんなに理解させるのは、難しいことなのに、それがちゃんとできていたので、よかった。」と多くの学生が積極的に評価している。その要因の一つとして、事前に外部講師を呼んで学生、教官ともに学習して臨んだことも忘れてはなるまい。

講演についても、学生から、授業で聞く講義とは違って興味深かった、自分の身近で起こってきた問題なのに知らなくて驚いた、といった感想を聞いた。法学の基礎としての社会の問題について考え、問題意識をもつ機会になったと評価できよう。

5．今後の課題

最後に、合宿研修を実施するにあたっての今後の課題と思われる点を指摘したい。

・2年次、3年次学生の関わりを

今回、クラス長が中心となって積極的に準備したとは言え、1年次にとっては、すべてが初めての体験である。大学生の社会性の欠如が言われるが、まさに彼らにとって、宿と連絡をとる、企画を立てる、会議を運営する、クラスの意見をまと

める等ひとつひとつが大仕事なのである。その一つ一つにわれわれが相談にのって対応したが、ここで例えば先輩学生が指導にあたってはどうか。これは、もう一方では、2年次以降の学生にとっても意義があると思うからである。すなわち主体性の向上、社会性の向上、積極的な勉学態度の形成といった学習目標は、2年次以降の学生に対しても継続して続けられるべきであると思われる。2年次が、翌年には1年生のために合宿研修のアドバイスを行い、あるいは他学部で行っているようだが、3年次と1年次の合宿研修を一緒に行うことで3年次がリーダーシップをとり1年次の指導を行う、といったことが考えられても良いのではないか。縦のつながりもでき、より有意義な合宿研修になると思う。

・2年次以降の受け皿作り

上の点とも関連するが、合宿研修も含めた基礎演習のような授業が、2年次以降（3年次以降は専門演習があるので、とりわけ2年次）でも履修できるよう受け皿を用意することが必要ではないかと思う。学生の感想の中に、「基礎演習の授業で、クラスの人たちからたくさんの影響を受けました。個人個人、意見が異なっており、議論することにおいては、とてもいい環境だと思いました。…このような場があったのは、とてもよかったと思います。もっと意見のやりとりのできる場があってもいいのにと思いました。」「生徒自身が行動することが少ない大学の講義では、基礎演習のような講義が大事になっていくなと思いました。2年次、3年次となる間にもっとこのような講義を受けようと思います。」という意見がある。基礎演習については、法学専攻でもまだ試行錯誤の段階で、課題は多くあるが、それでも学生からは、主体的に関われる演習形式の学習の機会をとりわけ2年次の学生に対して用意することが求められているのである。